様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　８ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１３１５３

研究課題名（和文）「1965年体制」成立期日韓ポストコロニアル文学における植民地主義批判の比較研究

研究課題名（英文）Comparative study of criticism of colonialism in Japanese and Korean postcolonial literature during the 1965 regime

研究代表者
原　佑介（Hara, Yusuke）

金沢大学・人文学系・准教授

研究者番号：４０７７８９４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　日韓1965年体制期に花開いた日本と朝鮮のポストコロニアル文学は、多様な形で植民地主義批判の論理を構築したが、本研究では、日本のポストコロニアル文学史における代表的な日本人作家である小林勝および村松武司の文学活動の様相を、朝鮮戦争期の動向を中心に明らかにした。併せて、彼らと同世代の在日朝鮮人ポストコロニアル作家である麗羅や李恢成のテクスト分析をおこなった。これらをつうじて、日本の他民族植民地支配の歴史から生まれた多様なポストコロニアル文学の現代的意義を再評価した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究では、日韓1965年体制期の日本と朝鮮のポストコロニアル文学を比較研究することをつうじて、日本人作家たちと朝鮮人作家たちが厳しい緊張のなかにありながらもしばしば植民地主義批判においてある種の共闘関係にあったことを明らかにした。おもに1920～30年代生まれのポストコロニアル日本語作家たちがこの時代に競い合うようにして残したテクスト群は、ヘイトスピーチなどの現代的課題に取り組む上でもきわめて貴重な東アジア共有の知的財産だと言える。本研究の最大の社会的意義は、当時の代表的な日本人作家と朝鮮人作家のポストコロニアル文学の連関性を明らかにしたことである。

研究成果の概要（英文）：Postcolonial literature in Japan and Korea, which flourished during the 1965 regime, built a logic of criticism of colonialism in a variety of ways. This study sheds light on the activities of Masaru Kobayashi and Takeshi Muramatsu, both of whom were famous for their work during the Korean War. At the same time, this study analyzed the texts of Korean postcolonial writers living in Japan from the same generation as them, such as Reira and Lee Hoe-seong. Through these studies, this study re-evaluated the contemporary significance of the diverse postcolonial literature that was born from Japan's history of colonial rule over other ethnic groups.

研究分野：日本近代文学

キーワード：ポストコロニアル文学　小林勝　村松武司　麗羅　李恢成　植民地主義　日本近代文学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

近現代日本社会の「コリアノフォビア」は、いわゆる知識人から大衆まで広くみられる国民的現象であるが、その広汎さと根深さ、激甚さにおいて、他のゼノフォビアと異なる。本研究の核心をなす問いは、「なぜ日本では、コリアンに対するかくも残忍で傲慢な植民地主義的心性が今なお存続しているのか、どうすればこれを克服できるのか」という喫緊の社会的・思想的課題に他ならない。ここ 10 年ほどで社会問題化したいわゆるヘイトスピーチについては、社会学や政治学、歴史学などの領域ですでに相当の成果が出ている。これに対して文学研究の領域では、依然として在日朝鮮人文学研究が孤軍奮闘しているのが現状であり、狭義の日本文学研究では目立った成果がみられない。本研究の学術的背景には、コリアンを特別な憎悪と侮蔑の標的にする排外主義的風潮がもはや破滅的水準に至っているにもかかわらず、文学・思想史における植民地主義の研究が乏しいという状況がある。

２．研究の目的

平田由美が「植民地主義の歴史は、主体でありうる他者との出会い損ないの歴史であり、植民者とはその出会いに失敗しつづける者の謂いである」と指摘しているが、この「出会い損ないの歴史」が現在も続いていることは明らかである。ところで、申請者が研究してきた小林勝の小説のなかに、朝鮮戦争期の植民者二世と在日朝鮮人の「出会い」をテーマにした「架橋」という作品がある。この小説が提示したのは、「帝国と植民地の不幸な過去をもつ二つの民族が、冷戦と新植民地主義という新たな「共同闘争」の局面において、一体どういう表情で向かい合えばいいのか」という思想課題であった。このように、ポストコロニアル日本語文学の担い手たちが共通して抱えていたのは、植民者と被植民者の「出会い損ないの歴史」をいかに乗り越え、「出会い（なおし）の歴史」への道をいかに切り開くか、というきわめてアクチュアルな課題であった。本研究の目的は、戦後文学に描かれた多様なポストコロニアルの「出会い」の場を、日本人とコリアン双方の視点から多角的にとらえることを通じて、軽視されがちであった戦後日本文学史の「帝国後日本語文学史」としての側面に光を当て、その意義を検討することである。

３．研究の方法

本研究の基本方針は、日本と朝鮮のポストコロニアル作家たちの「接触領域」および「故郷認識」の比較分析である。対象とする時期は、1970 年代までを中心とする。

本研究が主要対象とするテキストは、日本人植民者二世と在日朝鮮人二世の戦後／解放後の「接触」を描いた小説や論考、エッセイなどである。「二世」に限定する理由は、彼らは親世代と違い、植民地帝国の崩壊および解放後朝鮮の動乱によって「故郷喪失」を強いられたという点で、植民者‐被植民者の二項対立を越えたある種の共通体験を有する、との仮説を具体的に検証するためである。

これらの作家たちの来歴――出生とコロニアル体験、戦後／解放後の移動および定住の過程、その後の様々な再移動（「故郷」訪問や訪韓など）の経路、それらによって形成された人間関係など――を整理することが、テキストの比較分析に着手するにあたっての基礎作業となる。その上で、彼らの戦後日本での日本人／コリアンとの交流や衝突の様相および訪韓の際の行動とその回想を、テキスト分析および韓国でのフィールドワークによって明らかにする。ポストコロニアル日本語文学に対しては多様なアプローチが可能だろうが、本研究の挑戦的な着眼点は、異なる（対立する）コロニアル体験を経た植民者と被植民者のポストコロニアルの「接触」および共通体験としての「故郷喪失」にフォーカスを当てるところにある。

４．研究成果

日韓 1965 年体制期に花開いた日本と朝鮮のポストコロニアル文学は、多様な形で植民地主義批判の論理を構築したが、本研究では、日本のポストコロニアル文学史における代表的な日本人作家である小林勝および村松武司の文学活動の様相を、朝鮮戦争期の動向を中心に明らかにした。併せて、彼らと同世代の在日朝鮮人ポストコロニアル作家である麗羅や李恢成のテクスト分析をおこなった。これらをつうじて、日本の他民族植民地支配の歴史から生まれた多様なポストコロニアル文学の現代的意義を再評価した。

本研究では、日韓 1965 年体制期の日本と朝鮮のポストコロニアル文学を比較研究することをつうじて、日本人作家たちと朝鮮人作家たちが厳しい緊張のなかにありながらもしばしば植民地主義批判においてある種の共闘関係にあったことを明らかにした。おもに 1920～30 年代生まれのポストコロニアル日本語作家たちがこの時代に競い合うようにして残したテクスト群は、ヘイトスピーチなどの現代的課題に取り組む上でもきわめて貴重な東アジア共有の知的財産だと言える。本研究の最大の社会的意義は、当時の代表的な日本人作家と朝鮮人作家のポストコロ

ニアル文学の連関性を明らかにしたことである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 原佑介	４．巻 10
２．論文標題 日本文学にあらわれた「不逞鮮人」と朝鮮人女性――中西伊之助「不逞鮮人」と田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」を手がかりに	５．発行年 2022年
３．雑誌名 コリアン・スタディーズ	６．最初と最後の頁 40-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原佑介	４．巻 6
２．論文標題 植民者二世と被植民者二世のポストコロニアルの再会――李恢成「証人のいない光景」を手がかりに	５．発行年 2022年
３．雑誌名 フェンスレス	６．最初と最後の頁 77-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 原佑介	４．巻 7
２．論文標題 朝鮮戦争反対運動における日本人と朝鮮人の出会い――植民者作家が描いた断層と架橋	５．発行年 2020年
３．雑誌名 抗路	６．最初と最後の頁 130-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原佑介	４．巻 1
２．論文標題 『季刊三千里』と植民者二世――ポストコロニアル文学研究の観点から	５．発行年 2022年
３．雑誌名 内破する国民国家、架橋する東アジアーー『季刊三千里』1981	６．最初と最後の頁 229-257
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 原佑介	4．巻 30,3
2．論文標題 百年のヘイトを越えて――中西伊之助の植民地小説「不逞鮮人」と現代日本	5．発行年 2023年
3．雑誌名 政策科学	6．最初と最後の頁 255-270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 原佑介	4．巻 68
2．論文標題 断層と架橋――朝鮮戦争と日本ポストコロニアル文学の誕生	5．発行年 2023年
3．雑誌名 尚虚学報	6．最初と最後の頁 51-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 原佑介	4．巻 59
2．論文標題 「震災美談」と朝鮮人虐殺――証言文学としての江馬修の関東大震災小説	5．発行年 2024年
3．雑誌名 社会文学	6．最初と最後の頁 64-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　5件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 原佑介
2．発表標題 人が「国民」になる時――江馬修の関東大震災文学が描いた朝鮮人虐殺と日本人の国民意識
3．学会等名 日本比較文学会
4．発表年 2022年

１．発表者名 原佑介
２．発表標題 断層と架橋――朝鮮戦争とポストコロニアル日本文学の誕生
３．学会等名 尚虚学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 原佑介
２．発表標題 大邱は誰の呼び声――森崎和江のポストコロニアル文学を批判的に継承するために
３．学会等名 シンポジウム「地域・民族・性の交差を／から見つめる森崎和江――報告・討議・映像作品上映によるアプローチ」立命館大学
４．発表年 2023年

１．発表者名 原佑介
２．発表標題 日本近代文学にあらわれた「不逞鮮人」と朝鮮人女性――田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」と中西伊之助「不逞鮮人」を手がかりに
３．学会等名 国際高麗学会日本支部（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 原佑介
２．発表標題 朝鮮植民者二世小林勝のポスト植民者文学とその現代的意義（韓国語）
３．学会等名 BK＋近代韓国語文学未来人材教育研究チーム第２回フロンティアセミナー（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 原佑介
２．発表標題 歴史のなかに消えた故郷――朝鮮植民者二世小林勝のポスト植民者文学、その現代的意義
３．学会等名 金沢大学国語国文学会2021年度大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 原佑介
２．発表標題 三・一運動以後の植民者と被植民者の遭遇：中西伊之助「不逞鮮人」を中心に（韓国語）
３．学会等名 南京大学国際学術大会「境界・接触地帯と場の誕生：中国の韓国文学研究30年国際学術会議」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 原佑介
２．発表標題 断層と架橋：朝鮮戦争と日本ポスト植民者文学の誕生（韓国語）
３．学会等名 韓国研究財団一般共同研究支援事業「戦後日本引揚者の「植民地朝鮮」体験と記憶に関する研究」専門家会議、高麗大学亜細亜問題研究院（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 原佑介
２．発表標題 日本人植民者作家が描いた朝鮮戦争期の日本人と朝鮮人の出会い
３．学会等名 朝鮮史研究会関西部会5月例会
４．発表年 2020年

１．発表者名 原佑介
２．発表標題 日本語文学にあらわれた朝鮮戦争期の朝鮮人越境者――小林勝の反戦運動と麗羅の従軍体験に着目して
３．学会等名 国際日本文化研究センター第54回国際研究集会（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 原佑介
２．発表標題 日本語文学に描かれた「不逞鮮人」――中西伊之助「不逞鮮人」と田宮虎彦「朝鮮ダリヤ」を中心に
３．学会等名 第56回日本比較文学会関西支部大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 原佑介
２．発表標題 帝国のはざま、植民地の「密室」で出会う――中西伊之助が描いた三・一独立運動を手がかりに
３．学会等名 国際日本文化研究センター共同研究「帝国のはざまを生きる一帝国日本と東アジアにおける移民・旅行と文化表象」第2回研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 原佑介
２．発表標題 中西伊之助「不逞鮮人」における植民地主義的朝鮮人表象批判
３．学会等名 2019年度統一人文学世界フォーラム学問後続世代学術大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 原佑介
２．発表標題 日本人作家が描いた三・一独立運動――中西伊之助「不逞鮮人」を中心に
３．学会等名 日本比較文学会第55回関西大会（中部・関西支部合同大会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 原佑介
２．発表標題 歴史のなかに消えた故郷――朝鮮植民者二世作家小林勝の心情と論理
３．学会等名 連続シンポジウム「引揚げを語る、引揚げを考える」第2回
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 原佑介	４．発行年 2022年
２．出版社 オムンハクサ	５．総ページ数 399
３．書名 禁じられた郷愁――小林勝の戦後文学と朝鮮	

１．著者名 蘭信三・松田利彦・李洪章・原佑介・坂部晶子・八尾祥平編	４．発行年 2022年
２．出版社 みずき書林	５．総ページ数 727
３．書名 帝国のはざまを生きる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関